

京都大学大学院教授 フェロー 土岐憲三
 京都大学大学院助教授 正会員 清野純史
 京都大学工学部 学生員 ○片山裕己

1. はじめに

断層の破壊過程や地盤のQ値、地震基盤からの増幅度を考慮し、スペクトルモーメント法によって地表面における最大加速度の期待値を推定する手法を用いて、1999年に起こった2つの大きな地震、すなわちトルコ・コジャエリ地震と台湾・集集地震の最大加速度分布の再現を試みる。断層モデルとしては、アスペリティの有無を考え、さらにラディエーションパターンとして周波数依存型のものと全方向一定のものを考える。観測地震記録と比較して、周波数依存性のラディエーションパターンとアスペリティの導入に対する検証を行う。

2. 解析手法

断層を8×8個の小断層に分割し、断層面上の小区域に小地震を対応させ、断層の破壊過程にしたがって小地震を重ね合わせることで大地震を合成する。この際、ラディエーションパターンとして周波数依存型のものと全方向一定のものを考える。この重ね合わせによって求められた基盤岩上でフーリエスペクトルからパワースペクトルを求め、スペクトルモーメント法により基盤岩上での最大加速度の期待値を求める。これに増幅度を乗ずることで地表面における最大加速度の期待値を求めることができる。増幅度の評価方法としては、地質を5つに分類し、それらの地質条件によってそれぞれ増幅度を与えるものである¹⁾。断層のモデル化において、アスペリティを設定したものと設定しないものの2通りのモデルを仮定する。

3. 解析結果

トルコ・コジャエリ地震および台湾・集集地震について、ラディエーションパターンを変化させた2通り、アスペリティの有無を考慮した2通りの計4通りのシミュレーションを行ない、両地震の最大加速度の再現を試みた。トルコ・コジャエリ地震の最大加速度の分布を図1に、台湾・集集地震の最大加速度の分布を図2に示す。また台湾・集集地震の観測点におけるモデルごとの最大加速度の期待値は表2のようになった。

表1:断層モデル

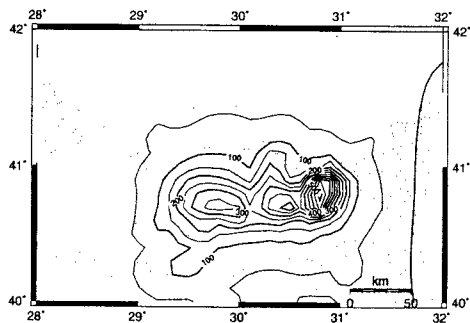
	ラディエーション パターン	アスベ リティ
1-a	周波数依存	有り
1-b	全方向一定	有り
2-a	周波数依存	無し
2-b	全方向一定	無し

4. まとめ

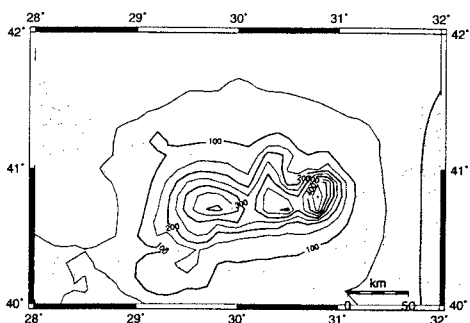
本研究のまとめとして以下のようなことが挙げられる。1) トルコ・コジャエリ地震においては、震源のIzmit付近では全てのモデルで260gal以上、モデルによっては300galを越える値が得られ、Duzceでは700galを越えるモデルもあった。また台湾・集集地震においては、震源の集集付近では全てのモデルで875gal以上、モデルBでは1090galの最大加速度が得られた。2) 台湾・集集地震では周波数依存型のラディエーションパターンを用いた方が、全方向一定のものをを用いたものよりも観測記録に近い値が得られ、断層付近の地震動の分布を的確に捉えることができた。

参考文献：1) 翠川三郎,小林啓美:震源域およびその周辺での地表面最大加速度分布の推定,日本建築学会論文報告集, 290,pp83-94,1980

Kenzo TOKI,Junji KIYONO,Hiroki KATAYAMA

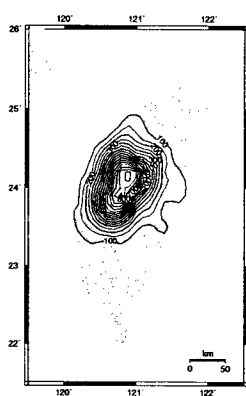


(a) モデル A

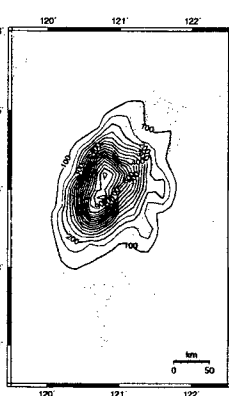


(b) モデル B

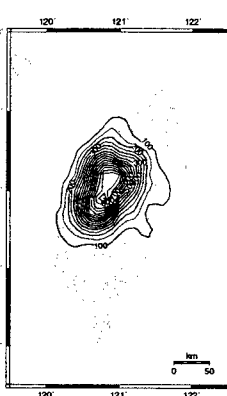
図 1: トルコ・コジャエリ地震の最大加速度分布



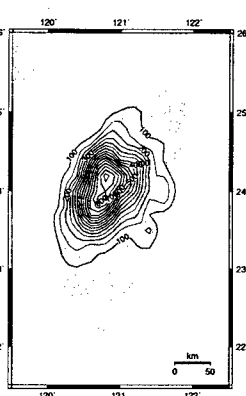
(a) モデル A



(b) モデル B



(c) モデル C



(d) モデル D

図 2: 台湾・集集地震の最大加速度分布

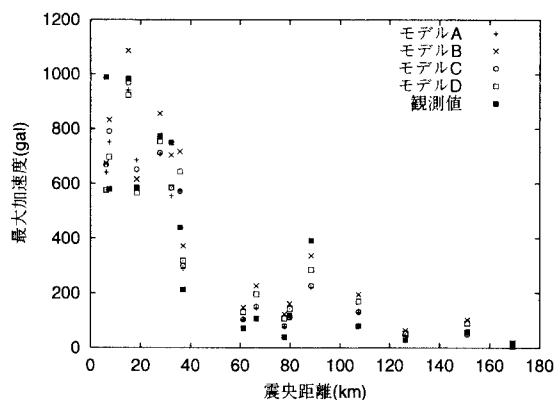


図 3: 台湾・集集地震の最大加速度分布

表 2: モデルごとの最大加速度の期待値と観測値との比較

単位: gal					
	A	B	C	D	観測値
台北	49.0	102.6	49.0	90.2	58.9
新竹	130.0	194.8	132.0	169.7	80.4
埔里	685.0	615.8	651.7	565.5	585.9
霧峰	706.7	856.4	712.1	753.7	774.4
名間	941.8	1086.5	968.2	924.0	983.0
日月潭	640.7	674.3	668.3	575.7	989.2
頭社	751.2	832.9	791.0	697.0	579.8
大武	10.8	19.6	11.1	16.9	5.6
台東	37.1	63.5	38.8	53.3	29.3
阿里山	289.4	371.7	299.2	317.7	213.0
花蓮	111.0	160.9	111.0	143.0	119.2